

芦屋で防災セミナー開講



リード芦屋新聞

災害時に生きる日常

発行元

リードあしや
協力校
クラーク国際高等学校
防災部

「災害時対応セミナー」が8月24日、芦屋市公光町の芦屋市立あしや市民活動センター「リードあしや」（橋野浩美事務局長）で始まった。セミナーはリードあしや主催で、12月までに5回に分けて開催される。第1回の今回はITをテーマとし、災害時におけるTwitterやLINE等、SNSの使い方について、NP法人コミュニケーションの松村亮平さんを講師に迎えて行われた。

セミナーのスピーカーバイザーを務める津久井進さん

ITで広がる街づくり

講師の松村さん、活用策を語る

セミナーで、ITツールの使い方について講演した松村亮平さんにインタビューした。松村さんは、普段ITを使った街づくりを行っている。商店街の人や街の人と話し合いながら、より過しやすい街をつくらうとしている。

松村さんは大学卒業後、ネット広告分野のエンジニアとして幅広い経験を積んでいたが、次第にITで街づくりを手助けしたいと思うようになった。

活動を始めたきっかけとして松村さんは、「ITについて知らない人が多くて

は「日常で利用しないものは災害時には役に立たない。この場を通し防災を日常にしましょう」と参加者に強く呼びかけた。

津久井さんは普段は弁護士として働いている。そんな彼が防災に関わる活動をしているのは、弁護士になった年に阪神・淡路大震災が起った事が深く関係している。当時ボランティアに参加した津久井さんは、自分に来る事が限られる無力感を感じた。この経験

をきっかけに、弁護士としての考え方にも大きな変化があったという。日常には衣食住すべてに法律が関わっている。津久井さんは「法律は、知り、活用することによって幸せになれる道具」と考える。活用へ導く立場である彼は、災害時においても同じ事が言える。知識を蓄え日常的に活用する事が、防災においても大切であるのだと言いつつ、「日常的に蓄えたい想像力を磨く事で、災害時に活用する事ができる」と語った。（尾鷲夏帆）



解決出来ない問題が多い。少しでも現場に近いところで声を聞いて解決させていきたい」と語った。主な活動として、地方に

住む車を利用しないと買い物に行く事が出来ない高齢者などの買い物難民にタクシーを簡単に呼ぶことが出来るアプリを開発、提供し

地域の繋がりで防災

和田さんに聞く「ためまっぷ」

住みやすい街をつくらう。インタビュの中で松村さんは「インターネットを

利用することに対して特徴を覚えてもらい、安全な方法を身につけて欲しい」と語った。（福高結菜）



「ためまっぷ」について講演した和田菜水さんにインタビューした。まえばちゃんの愛称で親しまれている和田さんが広報活動をしている「ためまっぷ」とは、地域行事などのその地域に根ざした情報がわかるスマホアプリだ。和田さんはもともと社会福祉協議会で働いており、そこで行なっていた災害支援の方面から今の仕事に就いた。

スマホアプリと災害は一見関係ないように思っても

見られないが、日常の繋がりが災害時の対応に直結している」と和田さんは語り、スマホアプリによる地域の繋がりがりづくりで災害対策をし

ている。さらに、地域には本来自治の力があるが、できていないけど気付かなかった部分が災害時に「見えてくる」と言う。それを事前に対策しておかなければならないと思っ、活動に参加している。常に変動していく街の情報を提供するに、ネットに載っている情報が満足するのではなく、現地に赴きその土地の人に直接話を聞くことが大事だと言う。

和田さんは「災害時に困っていることは日常でも誰か困っていること。だから、日常から困っている人に気を向けてほしい」と話した。（石田温子）